

昭和歌謡 誕生物語

第七日 文・山川智

ミリオンセラーうなり節は 他を圧する演歌歌手 存在証明の発行となった

都はるみ『アンコ椿は恋の花』

「普通のおばさんになり
たい！」

時は昭和39年、秋だった。東京五輪、10月10日が開会式だが、開会式5日前、突如として「うなり節」が響きわたる。初めて歌声を耳にした時——おそろく……脳天から爪先までに電流が走ったのではなかったか

名前も知らない若い女性歌手の空気を切り裂いて打寄せる。波浪のような小節回し。小気味のいいほど番切れが良くついに聞き惚れるような情感さえ醸し出す光彩を放った。都はるみ——
そんな天性の歌唱力で「アンコ便り」は「アンコ便り」は「アンコ便り」と唄い、次曲の便りが持たれた。香代の歌手誕生の経緯の時、卓抜の曲が聴立てされていた。

人気・実力ともに絶頂にあった都はるみが、そんな発言をして芸能界から突然引退を宣言したのは、昭和39年3月、36歳のことだった。

当時、週刊誌で芸能記者をしていた筆者は、縁あって彼女の「引退までの最後の一週間」に密着取材させてもらうことになった。はるみの所属事務所であるサンミュージックに挨拶に行くと、ご本人が社長(当時の)同伴で出迎えてくれた。だが、その表情は決意に満ちている、というものはほとんど遠く、酷く疲れているように見えた。彼女は、昭和39年3月、「困

ることヨ」でデビュー。初の

ミリオンヒットとなったのが、同年10月に発売された「アンコ椿は恋の花」(星野哲郎作詞・市川昭介作曲)だった。

表題の「アンコ」とは、伊豆大島に伝わる方言で若い娘(あねっこ)が詠ったもの。つまり、若い娘達の恋心は、椿の花のように真っ赤に燃えている、というわけだ。はるみはこの曲で、第6回日本レコード大賞の新人賞を受賞。さらに同曲は映画化され、話題になった。

だが、私生活で音楽プロデューサーとの長年にわたる不倫など、いろいろあった。それが、彼女の気持ちを疲弊させていったのだろうか……。

密着取材の最終日となった

12月31日。芸能生活最後の仕事である「第35回NHK紅白歌合戦」の舞台が幕を開けた。「夫婦坂」を涙で熱唱したはるみ。そして、番組本番終了後には彼女を見送るべく、出場歌手全員で、「アンコ椿は恋の花」が大合唱された。

仕事が終わりに車に乗り込むはるみに、私は幾度となくした質問を、最後にもう一度だけしてみた。

「本当に、本当に未練はないんですか？」

すると、きつぱりと「言った。これで、ようやく普通のおばさんに戻れるものね……未練なんてないですよ。あなたも1週間本当に」苦勞さまで

したね」

そう言って両方の手で私の掌をグッと握った彼女の表情には一点の曇りもなかった。——5年ぶりの復帰となった「第40回NHK紅白歌合戦」で、はるみはこの曲を熱唱した。信じられないだろうか、実は彼女が紅白で「アンコ椿」を歌うのは初めてだった。

思い出がいっぱい詰まった大切な曲。それが「アンコ椿は恋の花」だった。

■



Yamaguchi Chie

1962年生まれ、テレビ制作会社「制作」を経てフリーランスに。著書に『東方神起の謎』『東方神起10年を振り返る』『共ニイースト・プレス』『ビューティフルコミュニケーションのすすめ』(リトル出版)など。また、『出版プロデューサー作品として』(生きる 読家社)、『スタート出版』、『アキの社員』(旺文社)、『共ニイースト・プレス』などを著す。